



歌舞伎は なぜおもしろいのか

誕生から、およそ400年。日本人に長く愛されている歌舞伎の魅力、子どもの頃から歌舞伎に親しみ、歌舞伎の脚本を書いていたこともある作家・松井今朝子さんが語ります。

話●松井今朝子 構成●矢内賢二

歌舞伎の舞台には、江戸時代（17世紀～19世紀後半）の世界がそっくりそのまま残っています。歌舞伎の劇場に足を踏み入ると、現代人のわれわれも江戸のただ中に身を置くことができます。こういう空間は他の演劇にはありません。ただ集中して舞台上の物語の進行を見つめるだけでなく、華やかな空間の中で、まるでテーマパークのように観客それぞれがさまざまな楽しみ方を発見できる。それが歌舞伎の大きな魅力です。

目で楽しむ

歌舞伎を初めて見た人がまず驚くのは、その派手な衣装や化粧ではないでしょうか。例えば『暫』※1の主人公は、顔に赤い線を引いた「隈取」※2という化粧をし、巨大な鬘・衣装・刀を身に着けた、奇抜なデザインに満ちた姿で登場します。

歌舞伎の語源である動詞「かぶく」は、「先端的で異様な装いや行動をする」という意味です。つまり歌舞伎は本質的に奇抜さを伴うものなのです。京都の祇園祭の山車※3や、16世紀頃の武将の兜※4などには同じように奇抜なデザインのものがあります。これらの背景には、日本がヨーロッパとの交易を通じて外国文化と接触していたことの影響があったのではないかと思います。

顔に赤や青で太い線を引く隈取は、一つには暗い劇場の中で役者の顔を浮かび上がらせるという実用的な意味がありました。江戸時代の劇場にはほとんど照明設備がなく、今日では想像できないくらい暗かった

のです。もう一つ重要なのは、呪術的な意味です。顔に色を塗ったり装飾的な模様を描いたりする風習は世界中で見られます。顔に装飾を施すことで人間を超えた力を表現するという発想が、隈取には秘められているのではないのでしょうか。

そして『暫』や『寿曾我対面』※5といった演目は、江戸時代には毎年必ず上演されるという慣習がありました。少しずつ場面設定や演出を変えながら、全く同じ物語を繰り返し上演し、人びとはそれを毎年楽しんでいたのです。これは日本に「いつもどおり変わらないことがおめでたい」という考え方が根づいているためです。毎年安定した収穫を得ることを願う農耕民族の発想ですね。つまり歌舞伎は、新しい年の幸福を祈る年中行事、儀礼、祭りという意味も持っていました。

また歌舞伎の大きな特徴として、男性が女性を演じる「女形」※6があります。男性が女性を演じること自体は各地の演劇史に例がありますが、それを非常に洗練された形で今日まで残したのは歌舞伎だけでしょう。現代の歌謡曲をはじめとして、日本の芸能では、男性が女性を、女性が男性を表現するのは決して特別なことではありません。こうして性（ジェンダー）の壁をかるがると乗り越えてしまうところに日本文化のおもしろさがあります。

「廻り舞台」「せり」※7といった大掛かりな舞台装置も目を引きます。これらは江戸時代から行われており、もちろん当時はすべて人力で動かしていました。観客の見ている前で舞台装置全体が移動し、全く違うシー